琉球大学学術リポジトリ

琉球語沖縄首里方言のモダリティ：叙述・実行・質問のモダリティを中心に

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学
	公開日: 2018-05-10
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 崎原, 正志
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/40991

様式第１３号

琉球大学大学院
人文社会科学研究科委員会　殿

博士論文審査委員会

主査	狩俣 繁久	印
副査	石原 昌英	印
副査	宮平 勝行	印

学位（博士）論文審査の結果報告書

このたび、博士論文審査委員会として、学位論文の審査を終了しましたので、その結果について、下記の通り報告します。

記

学生番号	[redacted]	学生氏名	崎原　正志
人文社会科学研究科　比較地域文化専攻		主指導教員　狩俣 繁久 副指導教員　石原 昌英・宮平 勝行	
成績評価	学位論文	合格	不合格
論文題目	琉球語沖縄首里方言のモダリティ： 叙述・実行・質問のモダリティを中心に		
審査要旨	平成30年1月25日に学位論文審査を実施した。 本博士論文は、琉球語の中の沖縄語首里方言の文法論に関する記述研究、特に文法論の中の構文論のうち、文のモダリティに関する記述研究である。本博士論文は、第Ｉ部第1章は、モダリティとは何かを日本語のモダリティに関する先行研究のなかで包括的体系的な研究を行ってきた宮崎和人に基づいてモダリティの定義をしている。第Ⅱ部第3章 叙述のモダリティ、第4章実行のモダリティ、第5章 質問のモダリティが本論である。第Ⅲ部は本研究の総まとめである。叙述のモダリティ（第3章）は、認識のモダリティ、評価のモダリティ、希求のモダリティ、意志のモダリティの下位モダリティごとに分析、記述がなされている。全ての用例にグロスを付し、形態論を踏まえた分析がなされている。モダリティの記述で重要な役割を担う話し手と聞き手の関係性が理解できる文脈を明示した用例を使用していることは読者による再検証の可能性を保証している点でも高く評価することができる。 本博士論文がモダリティに関する日本語文法の先行研究を丹念に渉猟したうえで論を進めていること、首里方言を独立の言語と認め、固有の言語体系の記述に成功していることも高く評価できるものである。あわせて、本博士論文が首里方言のモダリティに関する最初の本格的な研究であるだけでなく、最も詳細にして網羅的な研究であり琉球諸語のモダリティ研究への貢献、日本語諸方言のモダリティ研究への一定の貢献もなすものであることも認められる。学位論文審査会は、本博士論文が博士の学位論文に値すると判断する。		

様式第１４号

琉球大学大学院
人文社会科学研究科委員会　殿

博士論文審査委員会

主査	狩俣 繁久	印
副査	石原 昌英	印
副査	宮平 勝行	印

最終試験の結果報告書

このたび、博士論文審査委員会として、最終試験を終了しましたので、その結果について、下記の通り報告します。

記

学生番号 [redacted]		学生氏名　崎原　正志	
人文社会科学研究科　比較地域文化専攻		主指導教員　狩俣 繁久 副指導教員　石原 昌英・宮平 勝行	
成績評価	最終試験	合格	不合格
結果要旨	副査宮平勝行の統括のもと、平成30年2月3日に最終試験を実施した。 提出された学位論文の題目は「琉球語沖縄首里方言のモダリティ：叙述・実行・質問のモダリティを中心に」である。 試験では論文に関することを中心に関連する分野、受講した科目等についても質問した。 ・論文の中心課題であるモダリティに関する先行研究、および、関連する分野・事項の質問に対して十分かつ的確に回答していた。とくに審査対象者が大きく依拠したモダリティ理論を採用した根拠が明確に説明されていた。 ・草稿提出後に実施した発表会での審査会から出された課題に対する回答を別添資料として提出した。時間の都合上、一部しか読み上げられなかったが、読み上げられなかった部分も丁寧かつ十分な内容の回答であった。 審査の結果、学位にふさわしい研究能力とその学識を有していることを確認した。以上の点から、本審査委員会は当該学生が学位の水準に達していると認め、最終試験に合格したと判断する。		